

# reverse + NにおけるNの特性とreverseの機能

黒川 尚彦

情報科学部 情報システム学科

(2011年9月30日受理)

The Characteristics of N and the Function of *Reverse* in the Noun Phrase “Reverse + N”

by

Naohiko KUROKAWA

Department of Information System, Faculty of Information Science and Technology

(Manuscript received Sep 30, 2011)

## Abstract

The aim of this paper is to clarify the characteristics of N in the noun phrase “reverse + N” and the function of the adjective *reverse* within the framework of Relevance Theory. Understanding “reverse + N” presupposes understanding N, which can occur in the antecedent or be retrieved from the context, because N functions as the foundation for interpreting “reverse +N”. “Reverse + N” is acceptable only when directionality is inherent in N or when it can be retrieved from the context. Although the concept of directionality generally consists of three elements (starting point, endpoint, and the direction between them), it is necessary to specify only two elements (starting point and direction) in the interpretation of “reverse + N”. In contributing to the meaning of “reverse + N”, the adjective *reverse* plays the role only of redirection.

キーワード ; 逆, 方向性, 関連性理論

Key word ; reverse, directionality, Relevance Theory

## 1. はじめに

形容詞reverseはoppositeとほぼ同じ意味を表すように思われるが、その使用に関しては必ずしも同じとは言えない場合がある。(1)-(4)に見られるように、それぞれの語が取る名詞によって容認度に差が生じる。

- (1) a. ??the reverse sex  
b. the opposite sex
- (2) a. the reverse direction (≒ (2b))  
b. the opposite direction
- (3) a. the reverse page (≠ (3b))  
b. the opposite page
- (4) a. reverse discrimination  
b. ??opposite discrimination

例えば、(2a) (2b)はほとんど同じ意味を表し、交替可能な表現であるのに対し、(3a) (3b)は確かにどちらも容認される表現であるが、それぞれ指示する対象物が異なる。ふつう、(3a)はあるページに対する裏のページを指示するのに対し、(3b)はあるページの隣のページを指示する。また、「異性」を表す表現として、通常(1b)が用いられるが、(1a)は用いられない。そして、(4a)は「逆差別」を表すが、(4b)のような表現でその意味を表すことはできない。このように、形容詞reverseはoppositeとほとんど同じ意味を表す場合から、異なる対象物を指す場合、またreverseが許されない場合からreverseのみ許される場合まで様々である。

本稿では、形容詞としてのreverseに焦点を絞り、reverse+Nという名詞句を取り上げ、次の2点について関連性理論の観点からの考察を行う。第一に、reverse+Nが容認される場合のNの特性とは何か。第二に、reverseの機能とは何か。そして、これらの問題に対し、形容詞reverseが容認されるとき、reverseと共起する名詞Nには「方向性」が喚起される必要があり、reverseはその「方向性」を逆転させる機能を果たすことを主張する。

## 2. reverse+NにおけるNの特性

### 2.1 reverse+Nが容認される前提

形容詞reverse(逆の)の意味を考慮すると、reverse+Nという表現を理解する前に、Nが文脈の

に特定されなければならないことが予測される。なぜなら、「逆」という概念は、あるものに対する関係を表すためである。例えば、「逆方向」という表現を理解するということは、どの方向と逆の関係にあるのかを理解することであり、前提となる方向の特定がなされなければならない。事実、次の(5)が会話の冒頭で発話された場合、容認されない。

- (5) A balloon was travelling in the reverse direction.

会話の冒頭のような直前の文脈(immediate context)がない場合、どの方向に対する逆なのかを特定することができない。このことが示唆しているのは、reverse+Nの理解には必ずNの理解が必要であるということである。ただし、Nの特定に関して注意すべきことがある。例えば、Nがdirectionの場合、具体的にどの方向を指すのかは問題ではない。例えば、具体的に東の方向などと客観的に特定される必要はなく、気球の進んでいる方向で十分である。というのも、the reverse directionは前提となるdirectionとは逆の方向を指すに過ぎないからである<sup>1)</sup>。このように、reverse+Nの理解にはNの理解が前提となる。

### 2.2 reverse+NにおけるNの特性

では、reverse+Nの理解の前提となるNには何らかの特性があるのだろうか。(1)-(4)で見たように、reverseには共起可能な名詞とそうでない名詞とに分けられる。例えば、reverseはdirection, page, discriminationなどとは共起できるが、sexとは共起できない。この違いを生み出す要因は何だろうか。まず、共起可能な名詞から考察を行う。

最初に、reverseとは共起するがoppositeとは共起しない(4)の例を見ていく。名詞discriminationは動詞discriminateから派生した語であることから、この名詞の概念には差別する側と差別される側という二者の存在が必然である。そして、一方から他方への差別という行為、またはその事態を表している。つまり、二者間には、差別という行為が一方向的に行われるという関係がある。このように考えると、reverse discriminationは差別する側と差別される側の立場が逆転することを表し、reverseが差別という行為の方向性の逆転を表していると捉えられる。このことから示唆されるのは、(4)のようなoppositeとは共起せずreverseとのみ共起する名詞N

に「方向性」という特徴が見られるということである。この「方向性」はreverseと共起する名詞に特異な特徴と捉えることは妥当なものであろうか。

次に、(2)で挙げたようなoppositeともreverseとも共起し、ほぼ同じ意味を表す名詞句のNについて検証しよう。(2)のdirectionは語自体が「方向」を意味することから、「方向性」が認められるのは自明である。(5)は冒頭では容認されないが、文脈からreverse + Nの理解の前提となる本来のdirectionが理解されれば(5)は容認される。このとき、the reverse directionは理解の基盤となる名詞Nのdirectionとは逆向きの方向を表す。やはり、(2)の場合でも、reverseは前提となるNの「方向性」の逆を表す機能を果たし、このことから共起する名詞Nが「方向性」によって特徴づけられることが分かる。

次に、(3)のようなopposite + Nとreverse + Nで異なる対象を指示する場合のNについてはどうだろうか。例えば、聞き手がthe reverse pageという名詞句を解釈する際、聞き手自身が注意を向けているページ（つまり、the reverse + Nの理解の前提となるN）を基準に解釈が行われる。このとき、聞き手と注意を向けているページとの関係は「向かい合っている」関係にある。この「向かい合う」という関係は、ヒト同士の場合であれば、双方からの視線が向かい合っているという認識に基づいて成立する関係である。ここで注意すべきことは、視線は物理的に実在するものではなく、認識者が相手に向かう経路、または相手から来る経路を心的にたどることによって認識されるものであるという点である。そして、このヒト間に成立する関係はヒトがモノと「向かい合う」関係にある場合にも拡張されうる。「向かい合う」という関係は二者間の双方向性の認識によって成立し、ヒトとヒトが向かい合う関係にある際に相手から自分に向かう経路を心的にたどることによってそれを視線と認識するのと同じように、ヒトがモノと向かい合う関係にある場合もモノからヒトに向かう経路を心的にたどることによって視線と同じようなものとして認識することが可能である（Langacker 1987；河上1996参照）。このように、(3)のような場合にも、reverse + Nの理解の前提となる名詞Nに「方向性」が認められる。Nから聞き手に向かう経路を心的に走査することで認識される方向に基づいて、the reverse pageはその方向を逆転させた「裏のページ」と解釈される。

最後に、reverseとの共起が容認されない名詞Nの例を見よう。(1)で示したように、reverse sexは容認されないが、その要因も「方向性」に帰するのだろうか。(2)から(4)で見てきたように、共起する名詞Nには方向性の喚起が見られた。しかし、sexという語自体には方向性が組み込まれていない。「性別」という意味でのsexという概念は「男性」と「女性」という2つの要素から成り、この2つの要素間には何ら方向性は見られない。しかも、pageの場合のように、聞き手の心的走査によって喚起される方向性もない。しかし、次のような反論があるかもしれない。「男性でないこと」は「女性」を論理的に含意し、逆に「女性でないこと」は「男性」を論理的に含意する。つまり、この論理的含意の関係には「方向性」が見られるのではないか。この反論は一見的を射ているように見えるが、論理的含意の関係は方向性のある関係というよりむしろ「等価」の関係にある。つまり、論理的含意の方向性は一方向的なものではなく、常時双方向的なのである。とりわけ、sexのような2つの要素からしか構成されない概念の場合はそうである。このことは先ほどまでの議論に新たな示唆を与えるだろう。つまり、reverseと共起可能な名詞Nの方向性は本質的に一方向的でなければならないことを示唆している。

sexの他にreverseと共起しない例には、ear, bank（土手）, extremeなどがある。これらすべてに共通する性質はbinarity（二元性）である。例えば、耳は左右の1対の耳から構成される。これは上で挙げたsexが男性と女性の2つの要素から構成される概念であるのと同じである。また、bankとextremeは、2つしかない構成要素そのものを表す語である。bankは川の両側にあり、extremeはあるスケールの両端を指す。このことから、reverseと共起しない名詞Nの特徴は、2つの要素からしか構成されない概念、またはその構成要素を表す概念ということになる。本質的に二元性を持つということは、その二者の間に一方向的な方向性を認めることができないことを意味する。このために、これらの語はreverseとの共起が容認されない。

これまでの議論をまとめると以下の通りである。形容詞reverseが共起する名詞Nは方向性が見出される必要がある。その方向性は語の概念に内在されていても、語用論的に喚起されてもよい。ただし、その方向性は一方向的でなければならない。また、共起しない名詞Nは、2つの要素からしか構成され

ない概念, またはその構成要素を表す概念であると特徴づけられる。

### 3. 方向性の喚起とreverseの機能

#### 3.1 「方向性」とは？

2.2節で, reverseと共起する名詞Nが容認されるためには, Nから一方向的な方向性の喚起が必要であることを述べた。まずは, この「方向性」についてより詳しい考察を行う。

語における反対の「方向性」に関して, Cruse (1986: 223) (Lyons (1977: Ch. 9) も参照) は, fall: riseのような方向が逆の反意語を例に挙げ, (6)のように述べている。

- (6) a. A direction, in the simplest case, defines a **potential path** for a body moving in a straight line; a pair of lexical items denoting opposite directions indicate potential paths, which, if followed by two moving bodies, would result in their moving in opposite directions, ...  
 b. Any direction from a base point must be established **either with respect to some second reference point, or by reference to the orientation or motion of some entity.** (強調は筆者)

(6a)から, 方向とは「潜在的な経路」であることが分かる。重要な点は, 実際にモノが動く経路だけに限らないという点にある。例えば, エレベーターの上昇では物理的な経路に基づく方向性が認められるのに対し, 気温や数値の上昇は潜在的な経路の心的走査に基づく方向性の認識に拠る。また, (6b)でCruseが指摘しているのは, ある始点(起点)からのいかなる方向の認識も, 終点か向きのどちらかによって確立されるということである。この指摘が示唆することは, 「方向性」という概念の認識には始点・終点・その間の経路に基づく一方向性のすべてが揃う必要がないということである<sup>2)</sup>。

ここまでの議論をまとめると, 「方向性」という概念は始点・終点・その間の経路に基づく一方向性から構成され, そのうち終点は随意的な要素である。これは(7)のように図示できるだろう。

(7) DIRECTION: [X → (Y)]<sup>3)</sup>

この(7)で示した, 始点(X)と方向(→の部分)という義務的な要素と終点(Y)という随意的な要素から成る1つのユニットが「方向性」の概念である。

#### 3.2 方向性の喚起とreverseの機能

reverse+Nが容認されるためには, (7)のような「方向性」の概念がreverse+NにおけるNの概念自体から, または文脈から語用論的に喚起されなければならないということが予測される。この予測を検証するために, もう一度(1)-(4)の例を見ていく。(4)のreverse discriminationから始めよう。2.1節ですでに述べたように, この表現の理解の基となる名詞discriminationの概念には差別する側と差別される側の二者が本質的に関与している。さらに, 差別という行為の影響は一方から他方に及ぼされ, その方向は一方向的である。このようにdiscriminationという概念自体から(7)で示した「方向性」の概念が容易に想起され, (8)のように表される。

(8) DIRECTION\* (= direction of discrimination): [X → Y] (X: discriminator; Y: discriminatee)<sup>4)</sup>

ここで注意すべきことは, 差別する側(X)と差別される側(Y)のそれぞれが具体的に誰であるかまで同定される必要はないということである。いずれにせよ, reverse discriminationはdiscriminationに関わる二者(X, Y)の一方向的関係が逆転することを表す。

これと類似した例にorderがある。(9)が示すように, order(順序)はふつうreverseと共起する。そして, orderも概念自体から「方向性」の概念を想起することが容易である。「順序」とは, 始点から終点へとたどる一方向性を表す概念であり, そこには始点と終点が内在している。(11)は(9)のreverse orderの理解に必要な名詞Nから喚起される「方向性」を, (12)は(10)のreverse orderの理解に必要な名詞N(chronologicallyの意味に含まれるorder)から喚起される「方向性」を図示したものである。

(9) By clicking on RETURN, you can see the palettes displayed in { reverse /\*opposite } order.

(10) There are two schools of thought about whether or not the information should be presented chronologically or in the reverse order. (BNC

の例を一部改変)

- (11) DIRECTION\*\* (≡ direction of the (colour) order):  
[X → Y] (X: colour A; Y: colour B)
- (12) DIRECTION\*\*\* (≡ direction of the (chronological) order): [X → (Y)] (X: t; Y: t+n) <sup>5)</sup>
- (13) DIRECTION\*\*\*\* (≡ direction of (the reverse) order):  
[Y → (X)] (Y: t; X: t-n)

(9)と(10)では喚起される「方向性」の概念が少し異なる。(9)のin the reverse orderはパレットの表示順が基となる順序の逆になることを意味している。パレットは色が一定の順序で並んでおり、必ず両端がある。このことから、始点も終点も含まない概念が喚起される。これに対し、(10)のin the reverse orderは直前のchronologicallyの逆順であることを表す。この場合、終点が喚起される必要はない。少なくともある始点とそこからの方向さえ喚起されれば十分である。そして、そのreverse orderは(12)の方向が逆転し、これは(13)のように示される。(12)と(13)のXとYは同じ時点を示す訳ではない。単に、YよりもXの方が今から遠い時点を表しているだけである。the reverse orderの場合でも始点と向きが喚起される。このことからreverse + NのreverseはNから喚起される一方向的な方向の逆転であると言える。また、上の例から明らかなように、同じorderという語であっても発話によって喚起される「方向性」の概念は異なり、どのような概念が喚起されるかは語用論の問題と言える。

次に(2)のタイプを見ていこう。(2)の典型例はdirectionであり、「方向性」という概念そのものを表している。そのため、directionには「方向性」の概念が内在しているのは自明である。ただし、上の例と同じように、始点と一方向的な方向性さえ理解されればよい。もちろん、これはdirectionの理解における終点の同定を妨げるものではない。

(3)のreverse pageに関わる方向性は、2.2節で見たように、(2)や(4)の場合とは事情が異なる。reverse pageの理解の基盤となる名詞N、つまりpageから喚起される方向性は聞き手の心的走査によって認められる方向性であり、page自体からは想起されえない。つまり、pageに関する「方向性」は意味論のレベルで認められることはなく、語用論的に喚起される。これは(14)のように記述されるだろう。

- (14) DIRECTION\*\*\*\*\* (≡ direction from the page to the hearer): [page → (hearer)]

ここで再度「方向性」の認識に関わる重要な要素を思い出してもらいたい。「方向性」の概念の認識に必須な要素は、始点と向きの2つである。(14)における(hearer)という表記はそれを反映しているのと同時に、終点が聞き手である必要はまったくなくということも暗に意味している。つまり、向きが聞き手の方向であるだけでよく、その終点は聞き手の手前でも後ろでもよく、しかもその位置は特定される必要がない。このことから、reverse pageのreverseは始点からの向きを逆転させる役割を担い、それは(15)のように表記できるだろう。

- (15) DIRECTION\*\*\*\*\* (≡ direction of the reverse page):  
[( ) ← page]

(15)で表記された矢印の向きは聞き手から遠ざかる向きを示している。このように、(14)の向きと逆の向きを示すことから、結果としてthe reverse pageは「裏のページ」を指示するものと解釈される。

ここで改めて、reverseの機能に言及したい。これまでの議論から明らかなように、reverseの概念はその理解の基盤となる名詞Nから喚起される一方向的な向きの逆を聞き手に解釈させる。つまり、reverseの概念はNから喚起される方向性の概念と合成することで、reverse + N全体の概念に貢献する。(4)のreverse discriminationでは、discriminationから喚起される方向性の始点と終点、つまり差別する側とされる側の二者が必ず存在する。そして、reverseはその方向性を逆にし、二者の関係が逆転することとなる。これに対し、(3)のreverse pageでは、理解の前提となるpageから喚起される方向性は、始点と向きだけが重要な要素である。この場合、始点はそのまま向きだけがreverseによって逆転する。このように、reverseの機能は向きの反転であるが、逆転した方向性は共起する語によって異なる。さらに、(9)(10)で挙げたreverse orderのように、たとえ同じ語が共起したとしても、文脈によって解釈される方向性は異なる。

これまでの議論を簡潔にまとめると、reverse + Nの理解の前提となる名詞Nから喚起される「方向性」の概念の必須要素は始点と向きの2つであり、reverseは向きの逆転にのみ貢献する。これが

reverse + Nにおけるreverseの役割と結論づけられる。

#### 4. 結語

近年の関連性理論は、語彙語用論 (lexical pragmatics) 的アプローチを採っている (Wilson 2004)。この研究方針には賛同するものの、まだ成熟しておらず不十分な点も見られる。そのうちの1つとして、自然言語としての語 (語彙) に対応する概念 (lexical concept) の捉え方が挙げられる。例えば、自然言語bookが発話され、聞き手の頭の中では概念BOOKが表象される。つまり、自然言語は心的表象のインプットとして機能しており、そのアウトプットこそが概念である。しかし、この概念の分析はまだあまり行われていない。確かに、bookのようなモノを表す語の場合、概念BOOK内に貯蔵されている百科事典的知識にアクセスできるだろう。しかし、本稿で取り上げたreverseのような形容詞の場合、それに対応する概念REVERSE内にどのような百科事典的知識が蓄えられているのかを想定するのは困難なように思われる。むしろreverseはスキーマ的な概念であるように思われる<sup>6)</sup>。もしこの想定が正しいとすると、単に自然言語reverseによってコード化された意味を概念REVERSEと表記するだけでは不十分である。むしろ、スキーマ的情報はどんなものか、またそれがどのように充足されるのか、その際に何らかの制約はあるのかないのか、など様々な点を明確にする必要があるだろう。

本稿で取り上げた形容詞reverseの場合、共起する名詞から少なくとも語用論的に方向性が喚起される必要があると主張した。このことから、形容詞reverseに対応する概念REVERSEを記述する際には、「方向性」の概念を組み込むことが要求されるだろう。その記述については稿を改めるが、本稿の分析は語彙語用論的アプローチの発展の方向性を示すという意味において示唆的であると思われる。

本稿で取り上げたreverse + NにおけるNが非常に限られた語しか扱っていないのは否めない。この点に関して、取り上げなかったreverseと共起する名詞についても今後考察を広げたい。そして、形容詞reverseの概念がどのようなものか、またどのように記述されるのかについて、今後の課題とする。

#### 注

- 1) これはDonnellan (1966) の言うreferential useとattributive useの関係に似ているかもしれない。例えば、Smith's murderer is insane.であれば、Smith's murdererが具体的にある人物を指示している場合は、referential useであり、この記述に当てはまりうる人に関する言及の場合、attributive useである。(5)のthe reverse directionもある方向に対する逆の方向であることを言及しているに過ぎない。もちろん、これが具体的にある方向 (東など) を指示していてもよい。この区分は西山 (2003) の言うように、語用論の問題と思われる。
- 2) 例えば、時計の針を例に挙げると、その進む方向の認識に終点の特定は必要ない。また、一見始点の特定も不要のように思えるが、少なくとも認識者がある時点での針の位置を始点に決める必要がある。ただし、これが任意の点でよいことは言うまでもない。
- 3) 小型大文字で表されるdirectionは自然言語に対して概念を表し、聞き手の心的表象を構成する要素である。
- 4) \*はアドホック概念 (話し手によって伝達される概念) を表している。また、アスタリスクの数は異なる概念であることを表し、例えば、DIRECTION\*とDIRECTION\*\*は異なる概念である。
- 5) tは時のある一点を指し、t+nはtよりも後の任意の時点を指す。またt-nはtよりも前の任意の時点を指す。
- 6) Carston (2002: 360) は、概念をコード化するものの中にはconcept schema (ある概念スペースを指示する役割を果たす概念スキーマ) もあると推測している。

#### 参考文献

- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell, Oxford.
- Cruse, D. A. (1986) *Lexical Semantics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Cruse, D. A. (2002) "Paradigmatic Relations of Exclusion and Opposition II: Reversivity," in D. A. Cruse, F. Hundsnurscher, M. Job, and P. R. Lutzeier (Eds.) *Lexikologie: Ein Internationales Handbuch zur Natur und Struktur von Wörtern*

*und Wortschätzen: Lexicology: An International Hand- book on the Nature and Structure of Words and Vocabularies* Vol. 1, 507-510, De Gruyter, Berlin.

Donnellan, K. (1966) "Reference and Definite Descriptions," *The Philosophical Review* 75-3, 281-304.

河上誓作 (編) (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社, 東京.

Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol.1*, Stanford University Press, Stanford.

Lyons, J. (1977) *Semantics Vol.1*, Cambridge University Press, Cambridge.

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 ひつじ書房, 東京.

Sperber, D. and D. Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.

Wilson, D. (2004) "Relevance and Lexical Pragmatics," *UCL Working Papers in Linguistics* 16, 343-360.

Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.